

連載
映画から
見えてくる
世界
第6回

せめぎ合つ最前線が見える

『君が代不起立』

木下昌明（映画評論家）



東京の学校の先生たちが「君が代」斉唱に反対してたたかっている姿を描いた『君が代不起立』というドキュメンタリー映画が完成した。これがよかった。何回見ても胸を打ち、目頭が熱くなった。たぶん、ここに登場する主な登場人物は、みんな自分の良心を守るために「どうしようか」と考え、悩み、躊躇しながらも「いまはまだ殺されるわけじゃない」と前向きに生きようとたたかっているからだろう。それにかれらを追いかけ、時には身を挺してその活動ぶりを記録しつづけ、それを民衆の抵抗の証しとしてまとめ上げ

たビデオプレス（松原明・佐々木有美）のしごとぶりも（画面のなかで）一緒にうかがい知ることができたからだろう。

中心となるのは、中学の根津公子、高校の伏見忠、養護学校の河原井純子といった東京都の教職員、それに元高校教員の藤田勝久であるが、かれらの学校や所属の組合などバラバラである。しかし四人は、入学式・卒業式で君が代斉唱のとき起立しなかったり、保護者に歌わないように呼びかけたりしたことで、都の教育委員会から懲戒処分を受けたたり、刑事告発されて、裁判でたた

かっている。

「君が代」について『広辞苑』では「天皇の治世を祝った歌。(中略)作曲は宮内省伶人林廣守。一八九三年(明治二六)、小学校における祝祭日の儀式用唱歌として公布」云々と記しているように、これは直接には明治天皇の「治世」、間接には歴代の天皇家をたたえた歌といえよう。この映画でも、卒業式で歌わなかった中学の女生徒の一人が、その理由として「戦前の天皇が主権だった」ときの歌で、戦後の国民が主権の憲法とは矛盾するものだと言言していた。「君が代」の「君」は、戦争中の戦意高揚歌としてよく歌われた「海ゆかば」の「大君の辺にこそ死なめ」の「大君」と同じく、「天皇」をたたえ、天皇の「代」のために国民は死を少しもいとわなにとする——戦争イデオロギーに通底していく。それなのに時の政府は、「強制はしない」と念

押しして「国旗国歌法」を制定した。それを今度は都知事の石原慎太郎が独断で通達を出して、教職員たちに強制をしいたものである。だから問われるべきは教員側にあるのである。石原の偏狭な政治姿勢にこそある。かれは、権力志向のおのが野望をとげようと、これまでも憲法をないがしろにし、新たな国家主義体制を整備しつつある小泉↓安倍路線に呼応して、地方(の中心東京)からその土壌づくりをしてきた時代錯誤の民族主義者である。このかれの横暴な企てに、いまや都民は「物言えぬ」民と化しつつある。

映画の教員たちは、これに抵抗してふんばっている。伏見先生は、「不起立」を貫きつつも「震えながら座っていた」と自らの胸のうちを率直に語っている。かれはゆれ動く内心を観察しながらその上で妻に決意を告げ、自分を前に押しやろうとし

ている。河原井先生は、「教育現場では、相手の意向を無視して強制してはならない」という信念を語っている。カメラが彼女の手を焦点をあけると、養護の生徒たちが、彼女を頼りにしてぶつかって、手は傷だらけになっている。藤田先生は、元板橋高校の教員で来賓として卒業式に出席していたが、保護者に「君が代」を歌わないようにお願いしたことで刑事告訴された。このときの「事件」をTBSが放映していて、そのシーンが挿入され、一部始終を目撃した女生徒の証言を重ねている(それが興味深い)。また藤田先生の人柄は、ある生徒の授業料を立て替えて卒業させたケースによく表されているが、残念ながら試写の段階でカットされた。ついでに言えば、試写をみた父母や教員の申し出でカットされた個所がいくつもある。そこにこのドキュメンタリーの困難もうかがえ

た。この点は、何度か試写をみたものとしてあえて指摘しておきたい。——このように映画は「不起立」でたたかっている教員の教育に対する信条や悩みもとらえていた。

なかでも根津先生の活動に密着して、その生き方にまで光をあてているところは出色であった。彼女はこれまで五回も「不起立」を貫いた教師で、そのたびに都（市）教委から呼びだされて事情聴取や懲戒処分を受けていたが、それでも抵抗をやめなかった——誰もが注目するねばり強いたたかひをしていた。半端ではなかった。一カ月停職の際には、毎日のようにプラカードを持って校門の前に立ちつづけ、つぎの三カ月停職と通勤二時間の遠方への転勤処分では、それぞれの学校の門前で抗議の意志を表すために立ちつづけた。カメラはその彼女を追いかけて、時には一緒に門前に張りつく。これが

（失礼だが）おもしろい。ドキュメン
トの妙味がここにある。学校の副校長や女生徒が出てきて騒いだり、近所の保護者？が通報したり、私服の刑事がおっとり刀で飛んできたり、目のよくみえない老人がやってきたり、と。彼女のささやかな日常の抵抗が波うつてくる。そこからいまという時代の「危うさ」がかいまみえる。それに対して根津先生は平常心で、誰にたいしても「おはよう」とか「こんにちは」とか「よろしくね」と声をかけ、聞かれると自分の不当な立場を説明し、時には相手があはいえばすぐこういうといった具合の議論もする。このような彼女の姿勢が、実は生徒たちに身をもって教育していることなのだ、観客（わたし）にもわかってくる。言葉だけではなく身体で教えている。それも、一人でも異議申し立てすることの大切さをである。

そして、いよいよ出勤の日、校門で出会った生徒に「今日からよろしくね」と呼びかけ、生徒もうちとけた風情で、一緒に校舎に向かっている。そのさりげない一瞬がいい。心のかよい合う瞬間がそこにとらえられているからだ。

また、この映画では、何人かの女生徒や障害のある田島夏樹という元女生徒（現在大学生）が登場し、それぞれ根津先生に教わったことやその思いを語るのだが、その一つ一つが魅力的な言葉にあふれ、観客をすがすがしい気分させてくれる。みんなしっかりとっているなあ、というのがわたしの感慨だ。彼女らの励ましや前向きな発言がどれだけ根津先生に自信と勇気を与えたかがよく伝わってくる。教師の考えを受け止めてくれる生徒たちとの心の響き合いをとらえていたからだ。

これまでビデオプレスの二人は、



旧国鉄からJR民営化に転換する時代に、不当にも解雇された労働者のたたかいを記録してきた。たたかいは全国にまたがっていて一様ではなかったが、そのいくつかの現場を訪ね、そこでの一人一人の生活とたたかいに光をあて、あたかも色合い

の糸をよりあわせて太い一本の綱にするように、個々人のそれぞれの時を全体の組織的なたたかいへと束ねてみせる。今度もこれと同じ手法がとられ、根津先生を軸にすえて、ラストに同じ「日の丸・君が代」強制に反対する予防訴訟の勝利判決シーンをもつてきて、全体のたたかいの一つのしめくりとしている（たたかいは終わったわけではない）。それに、たたかいは各人各様であつても相手は一つ（一人）である。この勝利が、それぞれのたたかいのつぎのステップとなる。このような手法は、まさに映画芸術でこそ成せるワザといえよう。

ともあれ、このドキュメンタリーから、日常ではみえてこない「むきだしの現実」がみえてくる。国家を統制し、人民を管理・支配しようとする一部の支配勢力と、それを拒否する民衆の側とのせめぎ合いの最前

線がここにある。

なお、この映画も、わたしが本誌でこれまで取りあげて批評してきた何本かの映画と同じく、一般の映画館での公開はすんなりというわけにはいかない。何しろ、東京を物が物にしようとしているもののお膝元でノーと訴えている映画だからである。この映画をみた一人一人が口コミで広げていくことが大切となる。それが燎原の火となつて広がることをわたしは願わずにはいられない。

※ビデオ・DVDは発売中。個人価格六〇〇〇円／上映時間一時間二七分。全国章の根上映運動をよびかけている。

※連絡先：ビデオプレス

TEL03(3530)8588

<http://www.vpress.jp>

※東京上映会・二月二三日
なかのゼロ小ホールにて